

特別展開催にあたり一見勘右衛門家文書をご寄贈いただきました。

平成25年8月16日、市長応接室で和田直子様より一見勘右衛門家文書のご寄贈いただきました。

市長からは、和田様に感謝状が贈られました。

今回の特別展開催にあたり、和田様に史料の借用を担当者からお願いしたのがきっかけとなり、和田様からご寄贈のお申し出を受けました。ご寄贈いただいた一見勘右衛門家文書は、和田様の御尊父・勉様が、生前、津市内で発見された襖の下貼り文書で、漂流以前の大黒屋光太夫についての内容が含まれている貴重なものです。漂流以前の光太夫の史料は殆ど無く、今回ご寄贈いただいた文書の中には、光太夫の船頭としての仕事ぶりわかるものも含まれています。今後、解説を進め、より詳しい内容をご報告したいと思います。



今回の特別展でも、代表的な4点を展示しておりますので是非ご覧ください。

これらの貴重な資料をご寄贈いただきました和田様に、改めてお礼申し上げます。

芙蓉館・ 勢松丸資料館

今回の特別展では、江島本町の松野家から廻米関係の古文書をお借りして展示しました。松野家は、江戸時代、白子組配下の廻船問屋でした。今回お借りした古文書の他にも、たくさんの資料をお持ちです。土蔵を改装したミニ美術館で江戸から明治・大正時代の陶磁器、ガラス器、浮世絵、漆器、雑飾りなどを展示されています。

開館日 一・六市開催日

開館時間 午前9時～12時

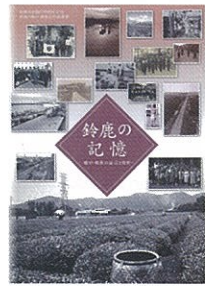
住所 鈴鹿市江島本町36-3 TEL:059-386-0023

今後の展示予定

11月21日(木)～3月16日(日) 光太夫の書いたロシア文字

3月20日(木)～7月13日(日) 光太夫の里がえり・帰郷文書の世界-

特別展開催期間中は第3水曜日も開館いたします。
また、年末年始は、12/24から1/4まで休館いたします。
皆様のご来館をお待ちしております。



平成24年は、ラクスマン来航220周年であるとともに鈴鹿市制施行70周年にあたる年でもありました。文化課では市内在住の75歳以上の方に、戦中・戦後の生活についてインタビューを行った内容を中心に「鈴鹿の記憶—戦中戦後の証言と資料—」を作成しました。

1冊2000円で販売しています。

ご興味をもたれた方は文化課(鈴鹿市役所 11階 119番窓口)でお買い求めください。

発送をご希望の場合は、1冊の送料は350円です。詳しくはTEL059-382-9031(文化課)まで。

鈴鹿市文化振興部文化課 大黒屋光太夫記念館

〒510-0224 鈴鹿市若松中一丁目1-8

TEL・FAX 059-385-3797(記念館)

TEL 059-382-9031(文化課)

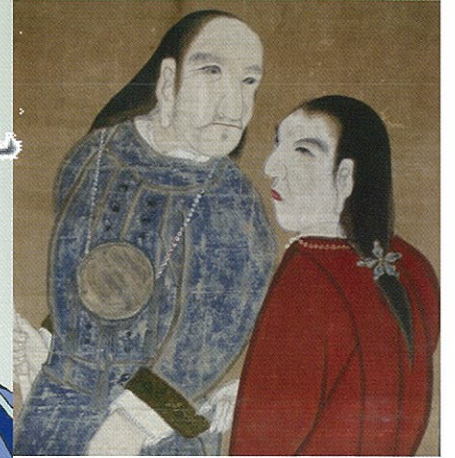
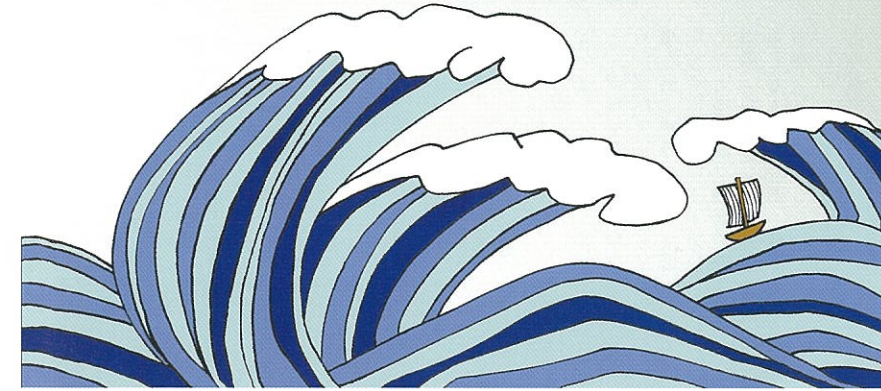
bunka@city.suzuka.lg.jp

Web サイトアドレス:

http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/kodayu



大黒屋光太夫



大光

(ダイ・コー) 第19号

第9回特別展 光太夫を生んだ船文化-白子廻船とその周辺-

この度、大黒屋光太夫記念館では、日本財団助成事業「船の科学館・海と船の博物館ネットワーク」の支援を活用し、第9回特別展を開催いたします。

江戸時代、白子は江戸を往復する廻船の拠点としてとてもにぎわった湊^{みなと}でした。紀州藩領であった白子は、紀州藩の廻米の積出港として整備され、江戸店持ちの木綿問屋^{きんめんもんや}たちが白子廻船を利用したことで、尾張国・伊勢国^{おわりのくに いせのくに}という一大生産地の木綿の集散地として非常に重要な地位を占めるようになります。

白子を利用した木綿問屋の集団(仲間)には、2つのグループがありました。一つは、伊勢商人が中心である江戸の大伝馬町に木綿問屋街を構える大伝馬町組。もう一つは、呉服(絹織物)問屋から木綿業界へと進出した商人たちの集団である白子組^{しろこぐみ}です。この2つの商人集団は、それぞれに白子の湊^{つみにどんや}を置き、そしてその配下の廻船問屋を掌握して、自分たちの木綿荷物を優先的に江戸へ運ぶシステムを確立しました。江戸では、一般の衣料として木綿の需要が高かったため、白子廻船は江戸への木綿の安定的な供給を行う上で、大きな役割を果たしました。

そして、その白子の廻船問屋に雇われて、木綿の輸送に携わっていた船頭^{せんどう}の一人が、大黒屋光太夫です。

光太夫の船頭としての記録はほとんど残っていません。しかし、光太夫が暴風雨に遭難した時や漂流中、そしてロシア滞在中に発揮した判断力・リーダーシップ・交渉術などあらゆるものが、船頭として求められる素質でもあり、彼が船頭時代に培ったものと言えるでしょう。

今回の特別展では、漂流者・大黒屋光太夫を生んだ白子廻船とその船文化に迫ってみたいと思います。

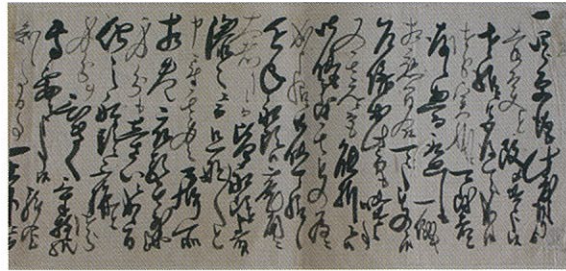
船頭・光太夫 一見勘右衛門文書より

今回の特別展で展示した和田氏寄贈の一見勘右衛門家文書は、断片ながら80点近い点数があり、一見勘右衛門家の廻船関係の古文書が多く含まれています。その中で、神昌丸や光太夫関係を展示しました。

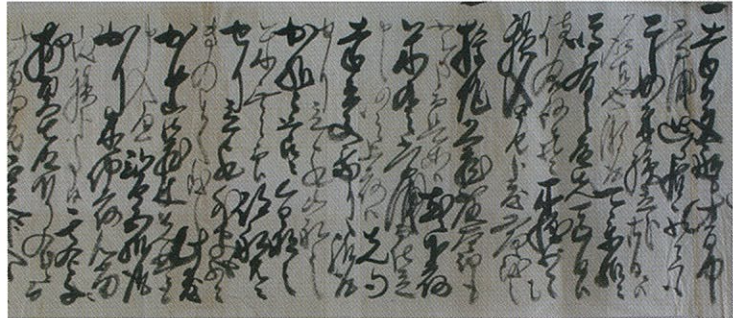
光太夫が、香良洲(津)や越賀(志摩)などを廻って、下荷となる米の積み入れを行っていることがわかる文書【右下】や、光太夫が無事入津したことを一見勘右衛門に伝える手紙、四郎兵衛が幸太夫(光太夫)と改名することを伝えた書状【右上】などです。

白子廻船は、江戸の木綿問屋の木綿荷物を中心に運んでいましたが、木綿だけでは出航できません。【右下】の資料は下荷となる荷物を集めるために、船頭の光太夫が伊勢湾内の各地を回っていることがわかります。光太夫の船頭としての働きぶりがわかる数少ない貴重な史料です。

一見家文書には廻船関係の他にも、江戸で営んでいた米問屋(店名は白子屋清右衛門)に関する文書などが含まれています。解説を進め、後日、展示等でご紹介したいと思います。

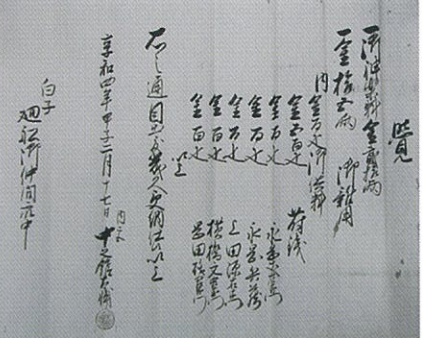


一、四良平儀も此度之下りより幸太夫と改メ遣し申候、左様ニ御心得可被成候、随分実艱ニ可致者ト存候、惣而取廻し一働キ相応間合可申ものニ候事、又其元ニ而も能折ニハ御叱も被致、其も給為ニ成申様ニ御叱可給候、近年、船頭ハ兎角ニ奢りし而、皆々船頭と申者ハ湊々ニ而且那くと申二付、其身之居り所相失し、衣類其外甘申し身分船頭ニ不構ニ、随分身分ヲひき氣持候様専事と申事候、給金知れたる事、一上下ニ而



二、幸太夫船も此間中鳥(香良洲・津市)浦廻り居候、少々づづ、こしか(少々)賀(志摩市)米積立申候、廿日ニハ名古や瀬取可参様ニ噂有之故、先一両日ハ待積何とぞ申度工面致し申候、權作・久蔵・藤太郎も登申候而、是等ハ直ニ下荷米ハ先之、当浦仕立出し候ノミ、米荷ハ先取セリ立、早出船申し候、か様之節ニ□□程之米無之候而ハ、跡船共ニセリ立申の外□□少々立申の口□□候、此度かめ山御蔵米、先達而も申入通式百五拾俵入り米、仲荷人留致積申遺候、其金子

【後欠】



享和4年 覚 (鈴鹿市蔵)

白子廻船仲間が伊勢神宮に神楽を奉納した際の代金の受け取り証。

今年、20年に一度の式年遷宮の年です。伊勢神宮は、今でも多くの参拝客でにぎわうわが国屈指の神社ですが、江戸時代にもお蔭参りの流行など、老若男女の信仰を集めたことで知られています。特に、この地方の船乗りたちは、常に遭難という命の危険と背中合わせだったために、あつい信仰心を持っていました。大黒屋光太夫も、伊勢神宮へ信仰を寄せていた船乗りのひとりです。

光太夫たちがロシアに漂流したときに乗っていた神昌丸の船中には神棚が祀られていました。光太夫は、嵐に遭遇した時には、髻を切り海中へ投げ入れ、伊勢神宮に祈りました。また、漂流中には、伊勢神宮の御籤をひいて陸までの距離を占っています。そして、漂流の果てにアリューシャン列島のアムチトカ島に漂着した時には、船中に祀っていた伊勢神宮の神棚をいち早く陸に揚げました。神棚に納めてあった伊勢神宮の御札は、その後も大切に携え持ち、ペテルブルグでは、エカテリーナ2世の眼にも触れました。エカテリーナ2世はそれを大変気に入り、自分の部屋に飾っていたと言うことです。光太夫が帰国する際には、その御札も持ち帰っています。

船着きの松



かつて白子の積荷問屋・竹口家の庭には大松があり、「船着き松」(写真)と呼ばれていました。白子には、他に林昌寺の大松(火事で焼失)と紀州藩主が宿泊する御殿の「福德松」の3本の松の大木があり、白子の湊を目指す船の目印になったそうです。特に、竹口家の船着き松と林昌寺の松が一直線に見える位置を目指して船が湊口に入って来たと言われています。この3本の松は全て消失してしまいましたが、同じく船の目印となった常夜灯は、今でも白子の周辺にいくつか残されています。

神昌丸

一般的な積高千石の弁財船

長さ:25-30m程度
幅:8m前後
帆柱:25m前後
帆桁の長さ:20m前後
帆:幅20m前後 長さ20m前後
楫:幅3m前後 長さ10m前後

身綱:帆を揚げ降ろしする
帆柱
帆桁
帆
手綱:帆の向きを変える
船親仁・三五郎
船の後:艦
船頭:大黒屋光太夫
船の前方:面
舵取り:次郎兵衛
水押
さがり
積荷
紀州藩:御蔵米500石 瓦150石余
商人荷物:木綿・薬種・紙・膳碗など400石
彦根藩井伊家:畳表2捲
大垣藩戸田家:雛人形を納めた長持一棹

上乗り・作次郎
楫:畳6畳程の大きさ。浅底の湊に入津する際には引き上げられる。

イラスト:吉田有里